

ならびきこえさせ給へらば、いかにひ、なあそびの様にて、おかしうおはしまさんとけいすれば、宮々笑はせ給

〔蜻蛉日記 下之下〕けふか、るあめにもさはらで、おなじところなる人、ものへまうでつ、さはることもなきにと、おもひていでたれば、あるもの、女かみには、きぬぬひてたてまつるこそよかなれ、さしたまへと、よりきてさ、めけば、いで心みむかしとて、かとりひ、なきぬ、みつぬひたり、またがひどもに、かうぞ書たりけるは、いかなる心ばへにかありけん、神ぞまらむかし、略下

〔台記別記〕久安六年正月廿三日辛丑、上衛近衛渡御女御藤原多子、廬御冠御衣、有比々奈遊事遣召、左兵衛佐實定所持之作物

〔昔々物語〕むかしひなは侍烏帽子なり、尤神代質素の時を傳へしゆへ、紙にて作りしなり、いづの比よりか、天子公卿の冠服を著す、諸道具に至るまで、あらぬぬ美を盡す、是古代を取失ひし故なり、

〔東都歳事記 二月〕廿五日 今日より三月二日迄、雛人形同調度の市立、中略内裏雛は寛政の頃、江者一般の製を工夫し、名づけて古今ひなといふ、是より以來世に行れて、大かた此製作にならへり、

〔嬉遊笑覧 六下〕ひなは、もとより小きものにて、後世までもまかありし、七八寸、或は一尺にもこゆるなどは、いと近き風俗なり、五元集、雛やそも基ばんにたてしまろがたけ、折菓子や井筒になりてひなのたけ、温故集、超波が句に、落雁にのまれてみゆる雛かな、その小きいへり、いま古今ひなは、寛政年中、江戸にて原舟月と云ふ者製し出で世に行はる、略中

今の紙ひなといふもの、寛永頃の繪にみゆ、これ小兒平日の手遊なり、又古き装束ひなは、今の次郎左衛門雛の體に似て、男雛は大刀なく、女ひな天冠なし、衣服の體はかはれ共、貞享元祿ごろのも、其如くなり、おもふに江戸ひなと稱するものは、享保已後の製なるべし、新野問答、鳥頸劔の條